

く恋しかりけり

### 六月号・清水あかね

就職が東京やつたらどうする?と聞けぬくら  
いの人ならばいる

御手洗靖大

小紋潤自選五十首私の好きな歌また素通りを  
して

### 七月号・古川 典子

この一年、歌壇での会員の活躍が目覚ま  
しい。中でも佐佐木頬綱・佐佐木定綱の短  
歌賞受賞、小紋潤や高山邦男の歌集は大き  
な話題を呼んだ。そんな活気の中、日々の  
作品から実感したのは百一歳の石井千恵子  
を始めとするベテラン勢の充実とそれに伍  
する若い世代の台頭である。肺腑を抉る程  
の突出した作は多くないとしても、実力が  
拮抗、全体の水準の高さを感じ、取り上げ  
る歌に迷った。内容の専門性や生活の現代  
化に伴う用語の変容、多彩さも再認識した。  
注目したのは着想や表現の独創性。短詩  
型故の類似が避け難い中、語の組合せに新  
味や意外性がある個性的な作にも出会えた。  
「心の花」では一つの題材や主題で纏め  
る一連が多い。歌が相互に響き合う威力は

被曝地の母校を知らず仮設にて校歌をうたふ  
卒業生等

### 天野 明

鉄筋の臭いをさせる作業着の女と同じ鮚煮定  
食

佐佐木定綱

前に立つ人のビニール傘越しの赤信号はじわ  
じわ長い

### 八月号・森屋めぐみ

捺印が上手くなつたと褒めくれるのばら生命  
保険の主幹

東條 尚子

母の心を透視する中川弘子、人形との同化  
を妖しく描く野原亜莉子、職場詠として、  
切口独自の月丘ナイル・象徴性を内包する  
加古陽、個性的な恋歌の山本枝里子・原尚  
美・河野洋子、父の晩年を詠み続けた倉石  
理恵、子を詠む服部心子、外地の松本実穂  
等、夫々の人生に立脚した表白が心に残る。

### 九月号から四首。

・はつなつの表参道ひとに酔ひ南国酒家の  
獺祭に酔ふ 経塚 朋子

・しつかりと垣の緑葉つかみゐる空蝉五月  
の夕べ解きやる 又野 蕙

・夫の無き四十一年を糸切れし凧のごとく  
に母漂ひき 後藤 秀彦

・この日ごろ届託あれどそれはそれこれ  
れとて笑ひて食みて 野見山鈴子